



Title	農耕社会の形成と近畿弥生社会
Author(s)	禰宜田, 佳男
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69740
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (禰冨田 佳男)

論文題名 農耕文化の形成と近畿弥生社会

論文内容の要旨

本論は、日本列島各地にそれぞれ特色のある農耕文化が形成された弥生時代において、近畿の社会が有した歴史的な特質を、生業を支える石器・鉄器などの道具類、集落構造、農耕祭祀、葬送儀礼などの分析を通して明らかにしたものである。なお、ここで「近畿」という場合、主には大阪平野や奈良盆地を中心とする後の畿内およびその周辺という程度の地域を指すこととする。

日本原始古代におけるこの地域の重要性は、続く古墳時代には列島初の中央政権であるヤマト政権の本拠地として、我が国の古代国家形成をリードしていく点にある。1960年代までは、広い平野を擁する近畿は、大陸の鉄素材を用いた農具の鉄器化による生産力の増大を背景に、階層分化を進展させ、やがて前方後円墳を生み出す政治的中心へと成長したという図式がごく通説的に語られていた。しかし1970年代以降、各地で発掘調査が進むと、鉄器の出土量、厚葬墓の発達度合い、中国鏡の入手力などを見る限り、近畿の「先進性」が必ずしも明瞭でないことが指摘されるようになってきた。これによって、近畿弥生社会の特質をいかに評価するかという点がヤマト政権成立過程の理解にもかかわる古代史上の大きな論点として浮上してきたのである。

そうした認識に立った本論文では、序章で課題の整理と研究方法を示した後に、第1章では石器・鉄器などの道具類、第2章では環濠集落と高地性集落などの集落構造、第3章では銅鐸祭祀と葬送儀礼を中心とした精神世界にそれぞれ焦点をあて、全国的な比較の視点を加味しつつ近畿における実態解明を行った。これをうけて第4章では、近畿弥生社会の諸特徴とその推移を時系列で整理するとともに、重要な論点である「鉄器化」の評価と意義の再検討に基づいて近畿弥生社会の特質を提示し、さらにヤマト政権成立過程への展望にも論究した。終章では、残された課題を整理し、今後の発掘調査、出土資料研究における留意点を提言した。以下、各章の要旨を述べることとする。

まず第1章では、弥生時代の社会発展の議論に深くかかわる「鉄器化」の実態解明を視野に入れつつ、大陸系磨製石器の波及・定着と、鉄への素材転換の過程を分析した。第1節、第2節での課題整理に続く第3節では、大陸系磨製石器が列島を東伝するにあたり、東北への波及は関東よりも早かったがその後定着しなかったこと、吉備地域では弥生前期に大陸系の磨製石庖丁を一旦受容したものの中期には先祖返りのように打製品が主流となったことなどを示し、縄文時代以来の伝統を含む様々な要因で、大陸系磨製石器の受容には顕著な地域差が存在することを指摘した。

第4節では弥生文化の北限にあたる東北の弥生石器を分析し、その北部と南部での地域差は水田稲作の受容のあり方の違いに起因するとの理解を示した。また弥生後期には石器が減少することから、少なくとも東北南部の会津盆地までは一定程度の鉄器が供給されたととらえ、この西方との物資・情報の交流が有力者の厚葬墓を生み、さらには会津盆地一帯が古墳時代の初期前方後円墳の北限域を形成する要因となったことを推定した。

第5節では伐採用の石斧・鉄斧の柄の型式分類を通じて地域性を明らかにするとともに、斧本体ではなく柄の特徴から鉄器化の問題にもアプローチできることを示し、方法論的な提起を行った。

第6節、第7節では、近畿弥生社会の「先進性」を吟味する上で、多くの論争が集中する鉄器の獲得や製作の実態について分析と考察を行った。第6節では、集落遺跡で検出された建物床面の「被熱痕」の事例を収集し、近年明らかになってきた弥生時代の小鍛冶技術との関連で検討した。その結果、これら「被熱痕」は簡素な構造の鍛冶炉の一部であった可能性があり、確認された遺跡の時期から判断して、近畿の鉄器製作が弥生中期後葉（前1世紀）まで遡りうることを指摘した。

第7節では、出土鉄器資料の新たな集成作業と石器の消滅過程の分析に基づいて、近畿における鉄器普及の進展について再検討を行った。鉄器は全体的には弥生中期中葉（前2世紀）以降増加傾向にあるが、近畿中枢地域での出土数が依然として少ない傾向が確認できる。しかし一方で、石器に着目すると中期から後期にかけて、(1)石器自体が激減する、(2)中期の畿内地域を特徴づけていた「畿内式打製尖頭器」が消滅する、(3)中期に用いられた一部の石器石材の流通量が減少する、(4)後期後葉には鉄刃を研磨するためと考えられる砥石を出土する遺跡が存在するなどの変化が生じたことが明らかとなった。こうした点から、遺跡に残存した鉄器の実数は少ないものの、弥生後期に至って近

畿社会が鉄製の道具類に依存する社会へ移行したと見るのが妥当であるという結論に到達した。

大陸の鉄素材を入手するためには長距離交易を可能とする広域流通体制の構築が必要であり、近畿弥生社会もその一翼を担った状況を想定することができる。こうした動きを通じて、交易を担った西日本各地の首長の間には、経済的側面だけでなく政治的にも関係が生じたことは、古墳時代の政治関係の形成に向けて重要な前提となったのである。

第2章では、集落の機能や地域的、時期的展開に注目して弥生社会の特徴を検討した。第1節、第2節の課題整理を踏まえて、第3節では丘陵部や山腹に営まれた高地性集落の石器組成を分析し、集落の類型化を行った。高地性集落の軍事的性格についてはこれを疑問視する意見があるが、打製石鏃が全石器の6割以上を占める遺跡や投弾が多数出土する遺跡もあり、その軍事的側面は否定できないと考えた。一方で生業面では、水田稲作の存否、堅果類獲得の有無などの点で、多様性が認められる。「眺望」を得るという共通項はあるものの、軍事的機能や物資流通とのかかわりには集落ごとに差異があり、性格は一つではないことを指摘した。

第4節では、近畿内部の流通関係を考えるケーススタディとして近畿西部の明石川流域および流域を遡った三田盆地、そして淡路島の集落展開を検討した。明石川流域では弥生中期に神戸市玉津田中遺跡が存在し、遠隔地からの物資が集積する流通拠点であったが、弥生時代後期には高地性集落である同市表山遺跡がその役割を担った。その明石川を經由して、中期後葉の三田盆地には一定量の鉄器がもたらされている。弥生時代後期には淡路島に淡路市五斗長垣内遺跡などの鉄器製作遺跡が出現する。明石海峡付近は時期によって変動はあったとしても、交通の十字路として物流の拠点であったと評価できる。

第5節では地域の核となる拠点集落を祖上にあげた。拠点集落の「拠点性」を疑問視する見解もあるが、筆者は大規模に集住していることに通常の集落とは異なる意味を見だし、拠点集落の概念は弥生時代の集団構造をとらえる上で有効と考える。ただ、従来から拠点集落とされてきた大規模集落は確かに政治・経済・宗教的な側面にわたって拠点性を有しているが、中規模以下の集落でも3側面のうち1～2において地域の中心的役割を担うものが存在するとして、これらについても拠点性があると理解した。とくに、高地性集落の中には、物資流通の拠点という観点で再評価が必要な集落があることを指摘した。

第3章は、人々の精神生活ともかかわる祭祀と葬送儀礼を取り上げた。課題整理に続く第3節では、銅鐸や土器に陰陽の線刻で表現された「絵画」を検討し、農耕祭祀との関りを再確認するとともに、「絵画」と大型の掘立柱建物、独立棟持建物との関係性を指摘し、近畿では銅鐸を使った祭祀が首長の権威を示す場として機能したことを想定した。一方、北部九州でも甕棺に「絵画」が認められるが、その内容は死者の再生を祈念したものと解釈した。また北部九州の葬送儀礼を検討した第4節では、甕棺墓などへの副葬品納置や粘土などで棺を密封する風習の背後にやはり死者の再生を祈念する意図があったと考え、副葬品は権威の象徴であるとともに、死者を護る辟邪としての意味を有していたことを強調した。第5節では、弥生墓制に見られる階層分化の実態について、西日本各地域を比較しながら検討し、近畿においては共同体的規制が相対的に強く、明確な個人厚葬墓の形成が遅れたと理解した。

以上の分析を踏まえ、第4章および終章では近畿弥生社会の歴史的な特質を考察・提示し、さらに今後の研究の課題や展望に言及した。

第1節で考察の視座を明示した後、第2節では時期ごとに、集落、葬送儀礼、祭祀、道具類の推移を整理し、とくに石から鉄へと道具類の素材変化が進んだ弥生後期に、古い物資流通体系の解体や葬制・祭祀の転換を伴うような弥生社会の大きな変質があったことを指摘した。その変質をもたらした主な背景として、第3節では弥生後期における道具類の鉄器化が果たした意義を重要視した。石器が完全に消滅するには至らないものの、生業に必要な農具が鉄器主体となることによって物資の長距離、広域流通という新たな仕組みが生まれ、そこに参画する有力者の階層的台頭と、突線鈕式銅鐸の分布からうかがえる近畿の政治的まとまりの形成を促したという理解である。この弥生後期の近畿社会の到達点こそ、あらためて「先進性」とも評価しうる性格のものであると考える。そして第4節では、農耕文化の形成とともに変化していく近畿弥生社会を、水田稲作が定着した前期後葉、鉄が主要な必需素材となった後期前葉、個人厚葬墓としての墳丘墓と掘立柱建物を主体とした大規模集落が登場する終末期という3つの主要な画期をもって把握し、こうした発展の延長上に、前方後円墳が成立する古墳時代を展望した。

弥生後期になっても、近畿では大陸の舶載品を副葬する厚葬墓が発達せず、また北部九州と比較して鉄器出土量が僅少であるという資料的実態は明白である。この点は、近畿弥生社会が共同体的規制の強い社会であったために貴重な金属器であっても私有財にならず、有力層の顕在化が遅れたという説明が可能である。そうした特質を有する社会が、大陸から東西南部に至る諸集団がかかわる鉄の広域流通ネットワークに本格的に参入したとき、共同体的な伝統から来る地域の強い政治的まとまりと、東西の集団と連携関係を結びうる地理的な優位性がいまわって、列島諸勢力の中で「中心性」を高め、近畿中枢を核とする中央政権の成立に至ったという理解を、本論の結論的な主張とした。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (補 宜 田 佳 男)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 福永 伸哉
	副 査 大阪大学 教授 高橋 照彦
	副 査 大阪大学 教授 村田 路人
	副 査 大阪大学 名誉教授 都出 比呂志
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：農耕社会の形成と近畿弥生社会

学位申請者 榎垣田 佳男

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	福永 伸哉
副査	大阪大学教授	高橋 照彦
副査	大阪大学教授	村田 路人
副査	大阪大学名誉教授	都出 比呂志

【論文内容の要旨】

本論文は、日本列島各地に農耕社会が形成された弥生時代において、近畿の社会が有した歴史的な特質を、生業を支える石器・鉄器などの道具類、集落構造、葬送儀礼、農耕祭祀などの分析を通して明らかにするとともに、続く古墳時代にヤマト政権がこの地域を本拠地として成立する背景を、近畿弥生社会の到達点の中に展望したものである。全体は4章からなる本論に序章と終章を加えた構成で、分量は400字詰原稿用紙換算で約900枚、図表219点である。

本論文の課題と研究方法を示した序章に続いて、第1章では、弥生時代の社会発展の議論に深くかかわる「鉄器化」の解明を視野に入れつつ、大陸系磨製石器の波及・定着の実態と、鉄への素材転換の過程を分析した。その結果、北部九州から東北に至る広範囲で受容される大陸系磨製石器は、その波及や定着度合いに顕著な地域差が存在するものの、弥生後期にはそれらが一斉に減少することから、少なくとも東北南部の会津盆地付近までは一定程度の鉄器化が進展したと理解した。

近畿についてはとくに詳細な検討を行い、弥生後期に石器自体が激減することに加えて、中期までの畿内地域を特徴づけていた「畿内式打製尖頭器」が消滅すること、鉄刃を研磨したと考えられる砥石が増加すること、斧の柄が鉄製斧頭を着装するのに適した形態となること、建物床面で簡素な鍛冶炉の可能性のある被熱痕跡が確認されることなどの状況証拠を積み上げ、出土鉄器の実数は少ないものの、近畿社会が弥生後期には鉄器に依存する社会へ移行したと結論づけた。

当時の日本列島では得られない鉄素材を大陸から入手するためには長距離交易を可能とする広域流通体制の構築が必要であり、近畿弥生社会もそこに参画した状況を想定できる。そして、交易を担った西日本各地の首長の間、経済面だけでなく政治的にも関係が生じたことが、古墳時代のヤマト政権形成に向かう重要な前提となったと考えた。

第2章では、そうした近畿弥生社会の特徴について、集落の機能や地域的、時期的展開に注目して検討した。おもに俎上にあげたのは高地性集落と拠点集落であり、集落ごとに生業面、軍事的機能などに多様性が見られるものの、両者とも鉄器を含む物資流通にかかわる重要な役割を担う存在であったことを、三田盆地や淡路島のケーススタディを踏まえながら明らかにした。

第3章では、人々の精神生活ともかかわる祭祀と葬送儀礼を取り上げ、近畿の銅鐸や土器に陰陽の線刻で表現された「絵画」が共同体の農耕祭祀とかかわることや、弥生の墓葬に副葬品がほとんど認められない特徴などから、近畿においては北部九州などに比べて共同体的規制が相対的に強い社会が形成されたと指摘した。

以上の分析を総括した第4章および終章では、近畿弥生社会の推移を、水田稲作が定着した前期後葉、鉄が主要な必需素材となった後期前葉、個人厚葬墓としての墳丘墓と掘立柱建物を主体とした大規模集落が登場する終末期という3つの主要な画期をもって把握した。そして、道具類の鉄器化が進んだ弥生後期に、鉄素材の調達のために生まれた長距離、広域流通網という新たな仕組みが、そこに参画する有力者の階層的台頭と、政治的まとまりを促したと理解し、こうした近畿弥生社会の発展の延長上に、ヤマト政権の成立を展望した。

【論文審査の結果の要旨】

水田稲作の開始を契機として農耕社会が形成された弥生時代は、列島社会が複雑化して国家形成に至る過程として重要な意味を持っている。同時に、続く古墳時代のヤマト政権が、大陸との交流の先進地であった北部九州ではなく、近畿を中心に形成された要因を探ることは、日本古代国家形成史研究においてきわめて大きな課題である。

本論文は、道具類の鉄器化が進む弥生後期に、大陸産鉄素材入手のための広域流通網に参画することが近畿の有力者の階層的成長と政治的まとまりを生み、東西日本の接点を占める地理的優位性を背景に、当地域がヤマト政権の核になっていくという道筋を、考古資料の詳細な分析によって明確に提示した点が特筆される。

鉄器化の進展度に関しては、使用後の回収や土中での酸化消失を考慮する必要があると、出土量のみからは実態をとらえにくいという困難さがある。これに対して榎垣氏は、伐採石斧の減少、磨製石器に占める砥石の割合の増加、斧柄の形態変化、鍛冶炉の可能性のある建物床面の被熱痕跡などに着目して、弥生後期の近畿が石から鉄に依存する社会に移行したことを明確にした。鉄器に転換する石器の側の変化や、これまで見過ごされてきた製作痕跡の検討から鉄器化の実態に迫ったアプローチは、その方法論的独創性とも相まって本論文のもっとも評価できる点である。

さらに、鉄器化の進む時期が社会の大きな変革期と一致していることを、集落、葬制、祭祀などの考察を加えて説得的に示し、その変革を経た近畿が倭人社会の政治的中心となる条件を備えるに至ったと理解した点は、古墳時代成立過程の研究にも大きな影響を与えるであろう。

このように高い評価が与えられる本論文にも、改善すべき問題点は残る。たとえば、資料分析の精度に地域的な精粗が見られることや、共同体規制の強い近畿社会が政治的求心力を持つに至る理論面での検討が不十分なことなどは、本論文の意欲的な課題設定を考えれば、惜しまれる点である。また、叙述内容と章・節・項のバランスにやや不整合がある点や、異なる章の間で用語の統一感を欠いた箇所が認められる点なども改善が望まれる。

とはいえ、ありふれた石器資料の分析を軸に鉄器化の過程を解明し、集落、葬制、祭祀にも目を配りながら、近畿弥生社会の特質とヤマト政権成立過程への展望に論及した本論文は、日本の古代国家形成史研究に明確な視座を提供する大きな意義を有している。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。